



平成24年度 果樹情報 第13号

(平成24年9月21日)



福島県農林水産部農業振興課

1 気象概況 (9月1～3半旬：果樹研究所)

平均気温は1半旬が24.6℃で平年より0.7℃高く、2半旬が24.8℃で2.2℃高く、3半旬が26.1℃で平年より4.7℃高い状況でした。この期間の降水量は38.5mmで平年の49%でした。

2 土壌の水分状況 (9月17日現在)

果樹研究所における土壌水分 (pF値：無かん水・草生栽培りんご園) は、深さ20cmと40cmは乾燥により測定不能、深さ60cmが2.5で乾燥状態にあります。

3 生育概況 (果樹研究所)

(1) もも

ア 収穫期と果実品質

「川中島白桃」の収穫始めは8月28日で平年より3日遅く、収穫盛りは9月1日で平年より4日遅い状況でした。果実の大きさは着果数が少なかったため431g (平年314g) と平年より大きく、糖度は15.7% (平年12.9%) と平年より高い状況でした。

「ゆうぞら」の収穫始めは9月3日で平年より2日遅く、収穫盛りは9月5日で平年並みの状況でした。果実の大きさは295g (平年314g) と小さく、糖度は13.8% (平年12.7%) と平年より高い状況でした。

(2) なし

ア 果実肥大 (9月14日現在)

果実肥大を暦日で比較すると、「豊水」は縦径が77.9mmで平年比99%、横径が90.0mmで平年比100%と平年並みの状況です。

また、満開後日数による比較でも、平年並みの状況です。

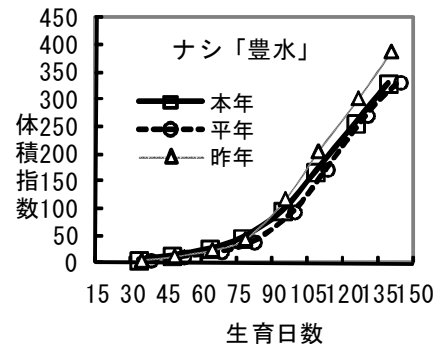


図1 なしの果実肥大 (9月14日現在)

イ 「豊水」の成熟状況 (満開後138日現在)

9月14日における成熟調査の結果は、果実硬度が5.0ポンドでほぼ平年並、糖度は13.7%で平年より高く、リンゴ酸含量は0.15%と平年並みの状況でした。また、果皮中クロロフィル含量は5.16 μ g/cm²で平年より高い状況でした。

(3) りんご

ア 果実肥大 (9月14日現在)

果実肥大を暦日で比較すると、「ふじ」は縦径76.4mmで平年比101%、横径が83.8mmで平年比102%と平年並みの状況です。

また、満開後日数による比較では、平年よりやや大きい状況です。

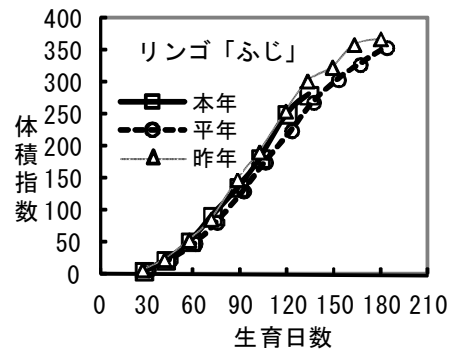


図2 りんごの果実肥大 (9月14日現在)

イ 「ふじ」の裂果発生状況（満開後132日現在）

9月13日現在の「ふじ」／マルバカイドウ（47年生）の内部裂果発生率は25%（昨年26%）、外部裂果発生率は2%（昨年2%）の状況でした。

(4) ぶどう

ア 果実品質

本年の「巨峰」（無核：長梢栽培）の果実品質は、果房重は412g（平年376g）と平年より大きく、一粒重は11.0g（平年12.0g）で平年並み、糖度は16.9%（平年17.0%）で平年並の状況でした。「巨峰」（無核：短梢栽培）の糖度は19.4%（平年17.3%）で平年よりかなり高い状況でした。

4 栽培管理上の留意点

(1) も も

ア 秋肥の施用

9月のできるだけ早い時期に秋肥を実施し、樹勢の回復に努めましょう。秋肥は尿素を中心に速効性肥料を用い、窒素成分で7kg/10a程度を施用しましょう。

イ 秋季せん定

若木などで樹勢が強く、徒長枝の発生が多い樹では、9月中旬頃（徒長枝が太る前）に秋季せん定を実施し樹勢の安定化を図りましょう。

また、主枝、垂主枝の日焼け防止を目的に配置した背面枝が長大化している場合は、基部の新梢発生位置まで切り詰めるか、数芽を残して短切しましょう。

なお、樹勢が中庸な樹や弱い樹では葉数確保を優先し、秋季せん定は実施しないか実施しても最小限としましょう。

樹冠上部の発育枝は、樹勢を維持するためにできるだけ残すよう心がけましょう。

(2) な し

ア 収穫

現在、「豊水」の収穫期となっているが、硬度とクロロフィルのバランスがほぼ平年並みに近づいているため、収穫基準は平年並みで良いと考えられます。

「あきづき」については、日本ナシ用カラーチャートで地色指数が3.5～4の果実が糖度や食味の点で優れると考えられます。地色指数が4を越えると糖度は高くなるものの、硬度が低下してシャリ感が消失する傾向が認められるため、収穫が遅れないように注意が必要です。

(3) りんご

ア 中生種の収穫前管理と収穫

各品種の生育状況に合わせて、摘葉や玉回し等の着色管理を遅れないように実施しましょう。

収穫は、地色等の推移に十分注意し適期収穫に努めましょう。

イ 「ふじ」の栽培管理

「ふじ」の摘葉は10月中旬頃から実施するが、栽培面積が多い場合は9月下旬頃から実施しましょう。この場合、1回目は軽く実施し（3～4枚）、10月中～下旬に再度強めに行いましょう。

(4) ぶどう

ア 収穫

収穫が遅れると肉質が柔らかくなるなど果実品質を低下させる原因となるため、適期収穫に努めましょう。

イ 秋肥

収穫後、9月頃は秋根が活発に伸びる時期であるので、養分吸収の盛んなこの時期に秋肥を施用し、来年の貯蔵養分を蓄積させましょう。ただし、新梢の遅伸びにも影響するので、新梢の停止状況、葉色、新梢の登熟程度などをよく観察して施肥の量を判断しましょう。

施肥は尿素を中心に速効性肥料を用いて、チッ素成分で2kg/10aを目安に施用しましょう。
なお、樹勢が強く、葉色が濃く、遅伸びしているような新梢が多い樹には、秋肥は施用しないでください。

5 病虫害防除上の留意点

(1) 病 害

ア りんごの各種病害

9月中旬以降、降雨等により湿度が高い状態が続くと、褐斑病、すす点病、すす斑病の防除が必要となります。

また、中生種の「陽光」や「ジョナゴールド」などで炭疽病が認められる場合、二次感染により発生が拡大するおそれがあるため、罹病果は見つけ次第速やかに除去しましょう。

イ ももせん孔細菌病

県内の発生量は平年より多い状況にあるので（8月31日付、病虫害防除所注意報発表）、秋季防除を必ず実施し（9月10日頃に1回目を散布し、その2週間後に2回目を散布する。新梢葉や果実で発生が多かったほ場では、落葉前までさらに1回追加し、2回目散布の2週間後に3回目を散布する。）、感染防止と越冬菌密度の低下を図りましょう。

ウ なし黒星病

県内の発生量は平年より多い状況にあり（8月31日付、病虫害防除所注意報発表）、本病の発生が多かった園では越冬菌密度の低下を図る必要があります。

今後は、「豊水」収穫後（9月下旬～10月下旬）に2回目の秋季防除を必ず行いましょう。枝の先端まで薬液が十分量到達するように散布してください。

(2) 虫 害

ア モモハモグリガ

モモハモグリガの第6世代の防除適期は9月5半旬頃になると推定されます。密度が高いモモ園では、越冬密度低下のため収穫後も防除を実施しましょう。

イ コスカシバ

本種による被害が多いモモ園では、収穫後（9月中旬～下旬頃）の防除（枝幹部散布）を徹底しましょう。

ウ クワコナカイガラムシ

発生の多い園では9月下旬頃までにバンド誘殺のバンドの設置を行いましょう。

表1 果樹研究所におけるモモハモグリガ防除時期の推定（平成24年9月18日現在）

今後の気温予測	第5世代成虫盛期	第6世代防除適期
2℃高い	9月17日	9月21日
平年並み	9月16日	9月21日
2℃低い	9月17日	9月22日

注) 演算方法は三角法による。起算日は8月27日

病虫害の発生予察情報・防除情報

病虫害防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

<http://www.pref.fukushima.jp/fappi/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。